

信仰を位置づけ、聖なる者の来訪によって、経済の根源、「交換」の原理が明らかにされると説いた。そこでは人間の側から見れば「供儀」が、神の側から見れば「贈与」が行われ、聖なる来訪者によって時間と空間が刷新される。

『民族』で一貫してデュルケーム派の宗教社会学が紹介されていることを考えてみれば、岡Ⅱスラヴィクの見解は、柳田の「人神」論と折口の「マレビト」論だけでなく、そこにマルセル・モースの贈与論を重ね合わせるものでもあった(モース自身、岡の「秘密結社」論に興味を示したという)。柳田と折口は、神々の世界と人間の世界を一つにつなぐ媒介者を見出したのだ。柳田の祖霊論に満足できなかった折口は、媒介者としてのマレビトを突きつめていく。媒介者は、祝祭の只中で、供儀にして贈与でもある力(「マナ」)の解放とともに顕現する。さらに折口は、柳田とは別の神を求める。おそらく折口の導きの糸となったのは、『民族』に集い、ともにウィーン学派のヴィルヘルム・シュミットを師と仰ぐ岡や宇野円空によって批判的に紹介されたラッファエーレ・ペッタッツォーニの「最高存在」である。ヨーロッパの比較宗教学と日本の民俗学は間違いなく共振していたのである。

モース宗教社会学の生成

溝口 大助

マルセル・モースの思想展開は、その「叔父」デュルケームの宗教社会学の展開と不即不離の関係にあった。二人の書簡からも、初期モース宗教論の「生成」においてデュルケームが重要な

位置づけにあることは明らかである(Durkheim 1998)。この事実は一面で真実である。だがしばしばモース宗教社会学の「生成」と発展において見過ごされてきた事実がある。それは、インド文献学に基づいて発展した初期モースの宗教論で決定的な役割を果たし、中期および後期モースの宗教論の展開にも少なからぬ影響を与え続けた「もうひとりの叔父 *deuxième oncle*」(Fournier 1994: 93) シルヴァン・レヴィの存在とその影響力である。

そこで本発表の目的は、①「供儀の本質と機能に関する試論」(以下、「供儀論」)から②「贈与についての試論——古代社会における交換の形態と理由」(以下、「贈与論」)までの理論展開における繋がりを手短かに紹介し、③インド学者仏教学者シルヴァン・レヴィの影響に着目することにより、モース宗教社会学のもうひとつの「生成」を証拠立てることにある。具体的には、①「供儀論」の成立過程を瞥見し、②「贈与論」の議論との連続性と差異を指摘し、③「供儀論」と「贈与論」の両方で採用されたシルヴァン・レヴィに代表されるインド学仏教学のアイデアの変遷を見ていく。とくに③のシルヴァン・レヴィのインド学仏教学における当時の位置づけを指摘することにより、モース思想におけるアジア的共振も探ってみよう。

①と②では「供儀論」と「贈与論」を瞥見する。「供儀論」の草案を書き上げていたモースは、初期デュルケーム学派宗教社会学セクションを一身に担うべく、ユベール、エルツをはじめとした同セクションの研究者と協力関係を築き、壮大なデュルケーム理論を基礎付けようとした。それは確かである。その証拠

に、モースは、「供儀論」の結論部でデュルケムを配慮して宗教社会学的視点をいち早く導入することで、「内在性」と「超越性」の矛盾を儀礼の上で同時に解決する「社会的諸物」の社会学的機能を指摘した(Mauss 1968: 306-7)。この点で「供儀論」は、ある意味偏ったデュルケムの主知主義的宗教論を後に主意主義的理論に転換させる決定的契機を孕んでいた。インド文献学者であったモースのこの思考を可能にしたのが、指導教官であったシルヴァン・レヴィによるアジアへの視点とりわけインド学の視点であった。この思考は、②の「贈与論」でも同じ連続線上で「別様に」機能する。というのも、モースは、「供儀論」で重要な要素として登場した「生贄」なしに、「社会的なもの」が機能する可能性を探索したからだ。これも「古典ヒンドゥー法」の文献研究から生まれたアイデアだった。「供儀論」と「贈与論」の連続性と差異は以上のようなのだ。

次に、モースが影響を受けたシルヴァン・レヴィのインド学仏教学における当時の位置づけを瞥見する。モースは、レヴィが一八九八年に公刊した『ブラーフマナ文献における供儀の理論』に衝撃を受けつつ、「供儀論」(及び未完の博士論文『祈禱』)を書いた。後の「贈与論」が書かれた時代のレヴィは、一九二六年に来日して日仏会館の初代館長となり、高楠順次郎と協力して仏教学を発展させていた。別けても山田竜城、和田徹城、蓮沢成淳をはじめとする高楠門下が長年にわたってシルヴァン・レヴィの指導の下で、『法宝義林——和漢資料に基づいた仏教百科事典 *Hōbōgiri: dictionnaire encyclopédique du bouddhisme d'après les sources chinoises et japonaises*』

を編纂し、モースは『法宝義林』をレヴィの「壮大な目論見」と絶賛した(Mauss 著作集c巻: 535-545)。

ペッタッツォーニ宗教史学の出発点

江川 純一

イタリア宗教史学の祖であるラッファエーレ・ペッタッツォーニの学を作ったものとして次のものが挙げられる。それは①G・カルドゥッチの「ストリチズモ(歴史主義)」、②日本の宗教・神話、③英仏独の諸学の三点である。ボローニャ大学に進学したペッタッツォーニは、カルドゥッチの講義を受け、古代ギリシア・ローマ世界を賞賛するのではなくその歴史的コンテクストを理解することの重要性を学んだ①。ペッタッツォーニが最初に書いた宗教史学に関する小論文は、一九〇四年に当地の新聞に掲載された「日本の諸宗教」という論考である。そのなかで彼は「天空存在(essere celeste)」としての天之御中主神に着目している。日本への関心は後に『日本の神話——『古事記』より』(一九二九年)と『近代日本における宗教と宗教的政治』(一九三四年)の二冊に結実することになるが、それらの著作では井上哲治郎、姉崎正治、加藤玄智、さらには穂積陳重らの洋文献が用いられている②。また、ペッタッツォーニは在学中からイギリスの民族学・民俗学、ドイツの民族学、フランスの宗教社会学・民族学の文献に触れ、それらをストリチズモの立場から批判する形で宗教史学を立ち上げた③。

そのような彼が宗教史学の中心に据えたのが最高存在(essere supremo)研究である。初期の研究では、最初の著作『サ